新入生宿泊型研修の実践と評価
－帝京科学大学アニマルサイエンス学科上野原キャンパスの事例として－

A Practical Study and Evaluation of University Freshman Camp
－ A Case Study at Uenohara Campus, Department of Animal Science, Teikyo University of Science －

今野直人（帝京科学大学），横山章光（帝京科学大学）
Naoto IMANO(Teikyo University of Science),Akimitsu YOKOYAMA(Teikyo University of Science)

要約：本稿は大学入学時初頭の顔見知りを作ることを目的とした新入生宿泊型研修（フレッシャーズキャンプ）が新入生にどのように受け止められているのかを評価し，新入生からの評価と課題を明らかにすることを目的とした．また，受け入れ側である上級生のキャンプ経験の有無が参加新入生の満足度に与える影響を分析した．

その結果，フレッシャーズキャンプが新入生にとって満足度の高い行事となっていることが示され，その後の大学生活への適応の手助けとなっていることが示唆された．これは上級生が中心となって企画・運営を行っていることによるものと評価した．

一方，上級生のキャンプ経験の有無による満足度をみると，キャンプ経験のある学生がチューターをした群はキャンプ経験のない学生がチューターをした群に比べて低いことが判明した．チューター自身がキャンプを経験していることで，従来あった特別感が失われ，普通に行われている行事と認識されることでチューターの熱意の低下を招いているのではないかと推察された．
Keyword：新入生合宿，初年次教育，友人作り，人間関係

Ⅰ．はじめに
1．背景

新入生にとって，大学生活へ適応する上で重要な課題の一つは，新しい人間関係の形成である．文部科学省（2014）は 2012 年度の大学・短期大学・高等専門学校の中途退学者が 79,311 人（2007 年度:63,421 人），休学者が 67,654 人（2007 年度：45,577 人）になり，この 5 年間で退学者は 15,000 人，休学者は 20,000 人以上増加した．中途退学の主な原因の一つが学業不振であり，高校と大学における教育のギャップに学生が適応できていない可能性が指摘された．その対応策として各大学における新入生を対象とする総合的教育プログラム（初年次教育）の推進が推奨されている．また，奥田（2011）の調査によると入学時の「質的低下」問題の所在の原因として指摘されるのが「友人関係の希薄さ」が挙げられている．村上ら（2014）は「入学当初の学生にとって大学生活での希望や願いをもって意欲的に活動するためにはその基盤となる仲間，学内で応援してくれるサポーターを得ることが必要である」としており，大学生活の初期における「友人作り」の成否は休学や退学，学業への意欲の減少などその後の大きな問題へと発展していく可能性を秘めている．友人からの情緒的サポートや道具的サポートが孤独感や抑うつの低減に寄与されている（和田，1992）ことからも，大学生活のはじめにおいて新入生の「友人作り」への積極的関与は後々の学生生活の質の向上が見込まれ，休学者・退学者へとつながるのではないかと考えられる．

本学アニマルサイエンス学科上野原キャンパスにおいても，サークル活動や授業への消極的な姿勢が目立つようになるなど学生の変化が見受けられるようになった．今のところ表だって見えないが，今後休学者や退学者の問題が表面化する可能性がある．それらの問題を少しでも未然に防ごうと，平成 25 年度から 2 年次のアニマルサイエンス実習においてコミュニケーション実習を実施した．コミュニケーション実習においては、学科内における全学生 160 名ほどが一堂に会し、コミュニケーションゲームやハンドクラフトなどのチームビルディングを通じて学生同士が個々に顔を合わせて交流を深め、顔見知りをつくることの重要性を認識した（今野ら，2015）．この実習のなかで，同様の内容を入学直後の新入生を対象として宿泊形式で行うのが最も効果的ではないかとの意見があり，平成

26年度よりアニマルサイエンス学科における宿泊型研修「フレッシャーズキャンプ（以下『A-FC』と省略）」と称して実施した（今野ら，2017）．

合宿形式による初年次教育はすでに多くの大学で実施されており，多くは1年生という早い段階で大学に慣れ，友人を作る活動を通して，退学者を出さないようにする“つなぎとめ”対策として実施しているものと推定される（梅澤ら，2013）．しかし一方で，目的を個別に見ると，大学生活への適応や学習スキルの習得，コミュニケーション能力の向上など（村上ら，2014），大学への帰属意識の増進，学生間の相互理解の促進，専門領域への関心の深化（香川ら，2012）など複数の目的を上げているものが多く，友人作りに目的を絞ったものは前例がなかった．友人作りと目標を掲げることにより気後れする学生が懸念されたため，本キャンプでは「顔見知りを作ること」を唯一の目的として実施を行った．

一方で学生のコミュニケーションの取り方に対する変化も大きい．日本ではスマートフォンの普及が急速であり（総務省，2014）ここ数年で大学生のコミュニケーションの取り方は劇的に変化しておりその原因の一つとしてSNSの急激な普及が指摘されている（植田，2013）．そのSNSも時代とともに移り変わり，近年は1～2年おきに新たなSNSが登場して人気となっている（植田，2013）．こうした背景もあり，教員は学生が抱えているコミュニケーションの悩みを把握するのが非常に困難である．そこで本キャンプでは，彼らの抱えている問題は年代の近い学生のほうが理解できると考え，上級生をチューターとして企画実施の中心に据えた．

このように平成26年より行ってきたA-FCであるが，平成28年度の3回目ではFCを経験した学生がチューターとして企画運営する側として参加することになった．それに伴い，第1～2回では手探り状態で企画運営を行ってきたキャンプが，第3回目にしてはじめて実際にキャンプを経験した学生がチューターとなり実施を行った．実際にキャンプを経験した学生がチューターとして中心となり，実施を行う事で新入生の評価がさらに上昇することが期待された．

そこで本報告では第1回（チューター：A-FC参加経験なし）と第3回（チューター：A-FC参加経験あり）のアンケート調査をもとに報告を行う．

2．A-FCの実施とその特徴

実施状況ならびに実施内容は表1・2のとおりである．プログラムの基本的な流れは第1回・第3回と概ね共通で，1日目のレクリエーションの内容や2日目のレクリエーション（謎解きゲーム）の内容にそれぞれ工夫を凝らした。
第2回についてはアンケートに不備があったため、今回報告では取り上げない．
そして本A-FCの独自の取り組みとして挙げられるのが以下の3つの特徴である．

① 目的を顔見知りを作る」ことに集中した．
② 学生主体で企画運営を行った．
③ 携帯電話（スマートフォン）の使用に制限を設けた．

表1. A－FC実施状況

		経験なし群（第1回）	経験あり群（第3回）
参加者	男	71	87
	女	92	81
チューター	3年	17	17※①
	4年	1	3
	M※②	1	0
引率教員		5	5
合計		187	193
欠席者		1	1
期間		平成26年4月12日～13日	平成28年4月16日～17日
場所		国立中央青少年交流の家（静岡県御殿場市）	

※①第3回のチューター3年次17名は第1回の参加経験者である
※②チューターのMは博士前期課程の学生を示す

表2. A－FC日程表（第1回・第3回共通）

月日	時間	内容
1日目	13:30	帝京科学大学上野原キャンパス本館集合　諸注意・挨拶など
	14:00	大学出発。バス4台にて移動。車中安全講習・レクリエーション
	15:30	宿泊施設着。オリエンテーション施設案内。
	17:00	夕べの集い（宿泊施設利用者全体で行う集会）
	18:00	夕食
	19:00	1日目のレクリエーション※③
	20:30	入浴・自由時間
	22:30	消灯
2日目	6:00	起床・清掃
	7:00	朝の集い
	7:30	朝食
	9:00	2日目のレクリエーション：謎解きゲーム
		1グループ10名前後で協力型謎解きゲームを行う
	11:30	野外炊飯・昼食
		竈と薪を使って調理を行う。
	14:00	情報交換タイム
	14:30	ふりかえり（質問紙調査を実施）
	15:00	バス発
	17:00	途中電車利用者を大学最寄駅にて降ろしたのち大学着解散

※③レクリエーションの内容
1回目：共通点さがしゲーム
3回目：共通点さがしゲーム・バースデーチェーン・猛獣狩り

Ⅱ．調査方法

A-FCが受け手である新入生にどの様に受け入れられているのかを評価した．また，A-FCの中核を担う学生のA-FCの経験の有無に注目し，「A-FCを経験した学生がチューターを行うことで，より顔見知りが増え，満足度の高いキャンプが提供できる」という仮説の元，チューターの「A-FC経験あり群（第1回）」と「経験なし

群（第３回）」の比較検証を行った．

対象は「チューターの A-FC 経験なし」グループとして，第１回 A-FC に参加した 163 名（以下「経験なし群」）ならびに「チューターの A-FC 経験あり」グループとして第３回 A-FC に参加した 168 名（以下「経験あり群」）とした．いずれも帝京科学大学アニマルサイエンス学科上野原キャンパス所属１年次の学生である．

調査は質問紙調査で行い，A-FC 実施最終日に調査用紙を配布しその場で回収を行った．調査は無記名で行い，調査の目的を調査用紙に記載し、回答は任意であることを説明した．調査項目は以下の通りである．

質問１：参加前の気持ちがどうであったか．

回答方法は「４：とても楽しみ」「３：楽しみ」「２：あまり行きたくない」「１：まったく行きたくない」の４件法とし，その理由を自由回答とした．

質問２：参加後の感想はどうであったか．

回答方法は「４：とても満足した」「３：満足した」「２:少し不満だった」「１:不満だった」の４件法とし，その理由を自由回答とした．

質問３：A-FC で知り合いはできたか．

回答方法は「３：たくさんできた」「２：すこしできた」「１：まったくできなかった」の３件法とし大まかな人数を自由回答とした．

質問４：チューターの態度はどうでしたか．

回答方法は「４:とても良かった」「３:良かった」「２:少し悪かった」「１:とても悪かった」の４件法とし，その理由を自由回答とした．

質問５：A-FC を今後も続けていったほうが良いと思うか．（経験あり群のみ）

回答方法は「４:とても思う」「３:少し思う」「２：あまり思わない」「１：全く思わない」の４件法とし，その理由を自由回答とした．

Ⅲ．結果

質問紙の回収は本調査ではキャンプ最終日のふりかえりの時間に回収を行い，経験あり群・経験なし群共に回収率が 100％であった．

１．A-FC の満足度の評価

A-FC は学生からいかなる評価を受けているのであろうか．それを知るための項目が質問１と質問２である．質問１では A-FC に参加する前の印象を反映し，質問２に関しては実際に A-FC に参加しての感想を反映していることから

表3. A－FC前後の評価の変化（経験なし群）

学生の評価 チューターA-FC経験なし			行事後 4pt. とても満足した	3pt. 満足した	2pt. 少し不満だった	1pt. 不満だった	行事前の評価別小計
行事前	4pt.	とても楽しみ	13	3	0	0	16
	3pt.	楽しみ	43	46	1	0	90
	2pt.	あまり行きたくない	26	23	0	0	49
	1pt.	まったく行きたくない	2	4	2	0	8
行事後の評価別小計			84	76	3	0	163

表4. A－FC前後の評価の変化（経験あり群）

学生の評価 チューターA-FC経験あり			行事後 4pt. とても満足した	3pt. 満足した	2pt. 少し不満だった	1pt.. 不満だった	行事前の評価別小計
行事前	4pt.	とても楽しみ	9	4	0	0	13
	3pt.	楽しみ	33	38	1	0	72
	2pt.	あまり行きたくない	18	52	4	0	74
	1pt.	まったく行きたくない	1	5	2	0	8
	–	無回答	0	1	0	0	1
行事後の評価別小計			61	100	7	0	168

らこの変化を捉えるためにクロス集計を行った（表３，表４）．

実施前の質問１では A-FC に対して概ね２～３人に１人（経験なし群：35.0％・経験あり群：50.3％）が「あまり行きたくない」「まったく行きたくない」と非積極的な姿勢であった．しかし A-FC 終了直後の満足度（質問２）ではほぼすべての学生（経験なし群：98.2％・経験あり群：95.8％）が「満足」もしくは「とても満足」と答えており，期待度よりも満足度が上回る傾向がみられた．さらに精査すると事前の期待よりも事後の満足度が下回った（表中水色部）のは経験なし群では４名，経験あり群では５名でであった．一方，事前の期待よりも事後の評価を上回った（表中橙色部）のは経験なし群では 100 名，経験あり群では 111 名であった．

A-FC を今後とも行事として続けていったほうが良いかを問うた質問５では「とても思う」「少し思う」を合わせて 96.4％が肯定的に評価した．（表５）．また，これに関連した自由記述では「顔見知りが出来る」「友達ができる」などが多数みられた．

表5. 質問5に対する回答

A-FCを今後も続けていったほうが良いか

		経験なし群	経験あり群
とても思う	4pt.	未実施	111
少し思う	3pt.		51
あまり思わない	2pt.		6
全く思わない	1pt.		0
総数			168

２．目的に対する達成度の評価

A-FC においては目標を「顔見知りを作る」という１点に絞って行った．そこで目標に対す

る到達度を自己評価するための項目が質問３である．経験なし群では無回答の６名，「まったくできなかった」の１名を除く96.3%が知り合いを作ることができたとし，経験あり群では１名の無回答を除く99.4%が知り合いをつくることができたと回答した（表６）．

表6. 質問3に対する回答（選択）

A-FCで知り合いはできたか。

		経験なし群	経験あり群
たくさんできた	3pt.	88	72
すこしできた	2pt.	69	95
まったくできなかった	1pt.	1	0
無回答	–	5	1
総数		163	168

３．チューターに関する評価

A-FCの企画運営の中核を担う学生チューターの評価が質問４である．経験なし群，経験あり群ともに１名を除き「とても良かった」「良かった」と肯定的な評価であった。（表７）．自由記述を分析すると「親切だった」「話しかけやすかった」「楽しませようとしてくれていた」「企画してくれたレクの内容が良かった」「大学生活のことを気軽に聞けた」など全体的に新入生との距離が近かったことが伺える内容であった．

表7. 質問4に対する回答

チューターの態度

		経験なし群	経験あり群
とても良かった	4pt.	135	129
良かった	3pt.	27	38
少し悪かった	2pt.	1	1
悪かった	1pt.	0	0
総数		163	168

４．チューターの経験の有無による評価の違い

チューター自身のキャンプ経験の有無による評価の差を比較するために，質問２～４において経験なし群・経験あり群で比較を行った（図１）．質問２「行事後の学生満足度」，質問３「知り合いはできたか」，質問４「チューターの態度」いずれにおいても経験あり群よりも経験なし群が上回った。

Ⅳ．考察

A-FCの評価は事前の期待度に比べて事後の満足度が大幅に上昇した（表３，４）．事前の期待度を尋ねた質問１の自由記述を見ると，集団での生活に関する不安と友人ができるか，孤立しないかなど人間関係の構築に対する不安を述べる意見が目立った．一方で事後の満足度を聞

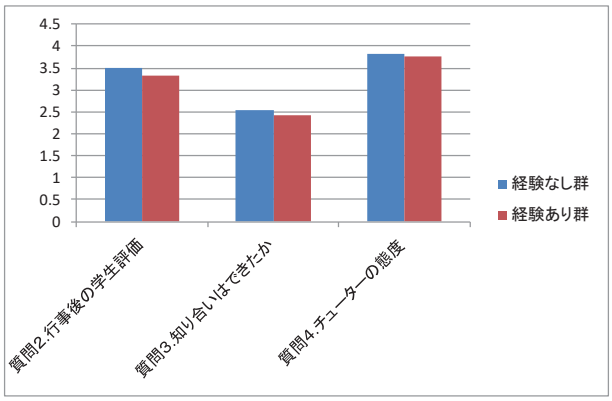

図1. 質問2～4におけるチューターのキャンプ経験の有無による評価の比較

いた質問２の自由記述を見ると，レクリエーションやキャンプ全般を通して楽しかったという意見や，顔見知りが増えた・友人ができたなど人間関係をうまく構築できたという意見が多かった．このことから「友達ができる」・「顔見知りができる」ことでキャンプの肯定的評価につながったと捉えられる．

これらの評価をまとめると「A-FCは事前には人間関係などに不安があり，期待度が低いが，実際に実施すると顔見知りができ，楽しみが得られる満足度の高 い行事」として評価されたといえる．

今回の結果をチューターのA-FC経験の有無に着目し比較すると、A-FC参加経験のないチューターが実施した経験なし群の評価が，参加経験のあるチューターが実施した経験あり群の評価がいずれも上回っていた（図１）．当初はチューター自身のキャンプ参加経験を活かすことで，より高い評価のキャンプが提供できると予想していたが，逆にチューター自身のキャンプ経験がないほうがより高い評価のキャンプが出来たということになる．

このような結果となったのには様々な要因があるように思われるが，ここでは一つの可能性を提示したい．経験なし群のチューターの特徴は，はじめて（１回目の）A-FCを企画運営したことにある．A-FCを経験していない彼らはこの行事が「特別」であるという意識があり，傍から見ていてもA-FCにかける熱意が感じられるものであった．彼らにしてみれば「新入生のこの時期にどのような事をしてもらったらよかったか」を具現化 するための企画であり，前例がないことからも細部にわたって一から企画をしていた．それはチューターへの意欲として目に見えており，チューターを募集した際に20

名を超える学生が手を挙げたことにも表れている（経験なし群の際は10名ほど）．一方，経験あり群のチューターの特徴は自分たちがA-FCを実際に体験してきたことにある．入学時から設定されてきたこのA-FCは彼らにとって特別なものではなく大学側が用意した「普通」のイベントの一つとしてとらえていたと考えられる．A-FCを一から作るのではなく，自分たちが体験してきたA-FCをどうアレンジするのかという考えになっていた感は否めない．この意識やA-FCに対する熱意の違いが新入生の評価として反映されているとも考えられる．

しかしながら，いずれにせよ１回目・３回目の間で評価に差はあったものの共に高評価を受けた行事という事には変わりなく，A-FCは新入生にとって大学生活をはじめる上で有益的な行事であったといえる．

Ⅴ．今後の課題

１．コミュニケーションの変化とA-FCの意義

参加前のA-FCへの印象を聞いたところ，経験あり群（第３回）の参加前の期待度が経験なし群（第１回）の参加前の期待度に比べて低かった（表３，４）．同項目の自由回答を分析したところ人間関係の構築への不安が多く記述されていた．この人間関係の構築への不安がキャンプへの期待度を下げている可能性がある．情報通信白書（総務省，2015）によると日常的なおしゃべりを身近な友人や知人と行うときに使うコミュニケーション手段を20代では52%が「LINEなどのメッセージアプリでのテキストのやり取りで行う」としており（30代43.6%，40第29.1%），SNSやネットによる非対面でのコミュニケーションが主流になりつつあることが伺える．そしてこの人間関係の構築に不安や悩みはコミュニケーションの変化に伴い年々増してきているのではないだろうか．このようにめまぐるしく変わるコミュニケーションツールの移り変わりのなかで，対面で人と人とが向き合う機会は重要であると考える．キャンプ後の満足度が大幅に上がることからも，対面コミュニケーションの機会を得ることができ，楽しいと思うような経験，顔見知りを作ることができたという成功体験を得ることのできるFCの意義は大きい．

２．実施時期の検討

本キャンプの目的は顔見知りを作ることに絞って行った．ほぼすべての学生の自己評価は顔見知りが「たくさんできた」「少しできた」と答えていたため，目標はある程度達成することが出来たと思われる．大学入学後の１年間は高等学校の友人関係から大学における友人関係へと移行する期間であり（Oswald & Clark，2003），山中(1994)は出会ってから２週間で２か月半後の関係の親密さが予測されるとしている．このことからも，入学後間もない時期に顔見知りを作るという目的のA-FCを行うことには一定の効果があったと評価できる．

今回の実施では，経験あり群は経験なし群に比べ約１週間遅くの開催となった（表１）．そのため経験なし群では入学生がガイダンスなどの入学初頭のイベントと１回目の授業が始まる狭間で実施することが出来たが，経験あり群では授業開始後１週間をおいての実施となった．わずか１週間しか差がないと言えどもこの間の形成する友人関係の影響は大きい．倉井（2003）の報告では「顔見知りが多いと照れてしまい素直に意見を言うことが出来なかった.」とある．ある程度の人間関係や友人関係が構築した後ではそれらの関係が新たな知り合いを増やすということを邪魔している可能性が示唆される．これらのことから「顔見知りを多く作る」という目的を達成するには，FC開催の時期に関して慎重に検討することが重要であろうことが示唆された．

３．チューターの重要性と関わり

そしてもう一つのA-FCの特徴として，上級生がチューターとしてキャンプの中心となり企画運営を行っていることがあげられる．上級生がこのようなキャンプに関わる試みはこれまでも報告されている（仲間ら，2010）（香川ら，2011）（梅澤ら，2013）（村上ら，2014）が，さらにもう一つの特徴である「顔見知りを作る」ことに特化した関わり方をする報告はない．このような関わり方をしたチューターの新入生からの評価は非常に高いものであった．さらにそれにとどまらず，A-FCの満足度を問うた質問２の自由記述においても上級生への感謝や憧れへの記載が数多く見られた．同じ様に上級生が中心となって宿泊を伴う必修の合宿を行っている島根大学でも「先輩の研修に臨む姿勢を通じて今の自分に未熟な点．不十分な点を見出し，目指す学生生活に臨んでいこうとする積極的な姿勢をもつことができる」とある（村上ら，2014）．このことから，上級生がチューターとなりキャンプ全般の企画運営の実施を行うことは

キャンプの満足度を底上げする可能性が高いことが示唆された.

一方，教員が前面に立ち上級生がサポートをする形式の宿泊型研修では上級生との交流が機会が少なく課題的内容となっていることが先行研究で示唆されている（梅澤ら，2013）．梅澤らは新入生が「上級生との交流」したという意識が少ない理由として，直接的に新入生と上級生がコミュニケーションを図る場が少なかったことがあげられるとしている.

これらのことから，A-FC において上級生がチューターとして企画・運営の前面に立って積極的に新入生と交流することは新入生の満足度を高めるうえで非常に有意義であるといえよう.

一方で継続した A-FC 運営を考えたときに，チューターの安定的確保とその質の維持に課題が残る．中核となる学生の質や教育がこのようなキャンプや初期教育の成否にかかわることはこれまでも報告されている（仲間ら，2010）（村上ら，2014）．A-FC の中核となるチューターは有志を募って集まった，いわば精鋭部隊であり今後同じように学生が自主的に集まるとも限らない．このチューターの確保や彼らに対する教育，そして彼らのモチベーションの維持も A-FC を継続させるうえで重要な案件である．安定的で継続したキャンプを行ううえではさらに上級生（A-FC 実施時の 4 年生）との連携を考える必要がある.

４．長期的な評価

長期的な視野で見たときの効果測定も課題である．A-FC の目的である「顔見知りを作ること」は大学に来やすくなることを狙ったものであり，長期的には退学者の減少，学生の授業やサークル活動に対する活性化，学力の向上へと繋げることを目標としている．これら長期目標の評価は A-FC 以外の要因による影響が非常に大きく測定が困難であるものの，いずれ評価が必要である．A-FC 自体がまだ手探りで実施している中で今成果を求めるのは早計であるが，今後は質の良いキャンプの継続実施と並行して，退学者の推移を分析したり，授業成績の評価を長期的に追うことなどの長期的な評価をしていくことが求められる.

Ⅵ．謝辞

本研究を行うにあたり A-FC の実行を承認ご協力いただいた教職員のみなさま，データの取集に尽力を頂いた卒業生の中田明里さん，そして A-FC 成功させるのに力を注いでくれたチューターの皆様に感謝を申し上げます.

Ⅶ．引用文献

今野直人，並木美砂子，古瀬浩史，中田明里，横山章光（2015）.「アニマルサイエンス学科におけるコミュニケーション実習の試みⅠ」.『帝京科学大学紀要』，11，143-147.

今野直人，横山章光（2017）.「アニマルサイエンス学科における新入生宿泊型研修「A-FC」の設計と実施」.『帝京科学大学紀要』，13，227-233.

香川貴志，荻野雄（2012）.「新入生合宿研修の設計と実践－ 2011（平成 23）年度 社会領域専攻の事例－」.『京都教育大学環境教育研究年報』，20，161-174.

倉井庸維（2003）.「コミュニケーション・キャンプⅡの実践とその評価」.『研究紀要』，40，169-172.

文部科学省（2014）.「学生の中途退学や休学等の状況について」http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/1352425.htm(2017.2.22)

村上幸人，藤田耕一，寺井由美，光森智哉，大谷修司（2014）.「宿泊合宿による「1000 時間体験学修」についての新入生セミナーの実際とその成果－ピア・サポート制度の活用―」.『島根大学教育臨床総合研究』，13，17-31.

仲間正浩，上間陽子，片岡淳，西岡尚也（2010）.「琉球大学教育学部新入生合宿研修の実施の準備と結果について－ 2009 年の実施結果とアンケート集計―」.『教育実践総合センター紀要（琉球大学）』，17，143-154.

奥田孝晴（2011）.「〈教育実践報告〉国際学部の初年時教育の展開と課題」.『生活科学研究』，33，157-169.

Osward,D.L.,Clark,E.M.(2003).Best friends forever?:High school best friendships and the transition to college. *Personal Relationships*,10,187-196.

総務省（2014）.「平成 26 年度版情報通信白書」http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h26/pdf/26honpen.pdf(2016.7.15)

総務省（2015）.「平成 27 年度版情報通信白書」http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/pdf/27honpen.pdf(2016.7.15)

植田康孝（2013).「コミュニケーションを求める大学生気質～無料通話アプリ「ライン（LINE）」の急拡大～」.『Informatio：江戸川大学の情報教育と環境』，10，13-27.
梅澤秋久，佐藤高樹（2013).「初年時教育における合宿研修の意義と課題－帝京大学教育学部初等教育学科初等教育コースの事例から－」.『帝京大学教育学部紀要』，1，3-21.
和田実（1992).「大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響」.『教育心理学研究』，40，386-393.
山中一英（1994).「対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討」.『実験社会心理学研究』，34，105-115.